



趙勇さん 大いに語る

中国楽器楊(よう)琴(きん)の演奏家趙勇さんは1989年に来日、現在は多久市「孔子の里」音楽講師としてさまざまな活動に取り組んでおられます。その趙勇さんに中国及び日本での来し方を振り返って大いに語ってもらいます。

中国楽器楊^{よう}琴^{きん}の演奏家趙勇さんは1989年に来日され、現在は多久市「孔子の里」音楽講師として演奏活動をはじめ、地域にとけこんでさまざまな活動に取り組んでおられます。その趙勇さんに中国及び日本での来し方を振り返って、大いに語ってもらいます。場所は多久市の孔子の里「東原庠舎」で、聞き手は佐賀県日中友好協会文化部の尾形節子（多久地区日中）と犬山俊郎（小城地区日中）です。

序

——これから趙勇さんの今までの半生についていろいろと話してもらおうと思いますが、今、振り返ってみてどんな思いがありますか。

人には不思議なエン（縁）があって、そのエンに従って生きていくのだと思いました。私は中国に生まれた趙勇ですが、夢にも思わなかった日本に住むようになった。これも、このエンによって私の人生の道が開けて、がんばって生きてきたのです。

1. 子どものころ（楊琴との出会い）

——では先ず子どものころのことからお話してください。

私は1957年、中国の吉林省長春市で生まれました。日本でいえば昭和32年になります。

——すぐ日本の年号が出てきますね。

私も日本に来てから、いろいろちゃんと勉強したからね。（笑）

50年代と言うのは（もちろん後で知ったことです。親や先輩に聞いて）、中国の大変貧しい時代でした。食べるものも十分にはなく、ミルクなども不足していて配給制でした。粗食で育てられました。この時代はみんながそうだったのです。

この当時、父は鉄道局（鉄路局）関連の建築会社の経理の仕事についていて、母は同じ鉄道局病院の看護婦長をしていました。そして二人とも音楽活動に携わっていました。

父は、もともとオーケストラの指揮者だったのですが、そのオーケストラが解散になった後、市内の音楽愛好家に呼びかけて、新しい劇団を作ったのです。母もそこで現代京劇の出演者として活躍していました。両親の音楽活動の主な場は、中国全土の鉄道局の各地方分局を回るツアー公演でした。

私も両親の影響で、いつの間にか音楽を聴くのが好きになりました。この時代はテレビなどなく、ラジオしかない時代です。私は、ラジオから音楽が流れてくるといつも聞き入っていました。父はそんな私の様子を見て、この子は音楽が好きのようだ、音楽の才能があるならそれを引き出してやろうと考えたのかもしれない。

5歳のころだったと思う。ある公演の前の練習の時、試しに打楽器（京劇用のもので、日本の木魚

に似た楽器)を触らせてもらった。これは京劇のテンポをとるもので、これに合わせて俳優が歌うのである。練習の中で、私の打楽器と俳優の歌とがピタリと合うようになったのです。オーケストラの楽員もみんなびっくりして、大変ほめてくれたことを覚えています。こんなこともあって、私も公演に参加させてもらうようになりました。

小学校に入ったのは1966年です。両親とも鉄道局に勤めているので、長春鉄道第1小学校に入りました。1966年は毛沢東の文化大革命の始まりの年です。学校では、今までのような授業はほとんどなくなり、政治的な面が大変強調されるようになりました。知識・学問のある教師たちは走資本主義の当権派——資本主義思想の持ち主で、悪い人——ということで迫害され、下放(いなか・農村へ行き、労働をしながら正しい思想を学びなおす)されました。それに代わって工人(労働者)や農民が先生として学校にやってきました。このような中で知的な教育はおろそかにされ、毛沢東の教えばかりが広められました。

例えば、国民党との戦いや抗日戦争とか、政治的な面ばかりが強調されていました。世界中で一番幸せな国は、この毛沢東のいる中国である、などということが学校の授業の中心でありました。こんな世の中ですから、この教えに少しでも不満を言ったり、反対すれば迫害されました。

そのころの中国は、すべてが毛沢東思想を中心に動いていたのです。父母が活動していた現代京劇というのも、毛沢東思想によって構成されたものでした。父はこの劇団の中で、音楽活動に専念していましたが、一方では子どもの将来の生きる道についても悩み、考えていたようです。子どもには、やはり知識(学力)も必要だし、なにかの技(わざ)・技術を身に付けておくことも大切であると。今は、学校の勉強がストップしているが、このままでは子どもの将来にはよくない。このような思いの中から、父は私に楽器の演奏をさせ始めたのではないかと思います。

幸いなことに、私の学校の音楽室には中国の民族楽器や西洋のオーケストラ用の楽器などがたくさんありました。子どもたちはその楽器を自由にさわれました。先生も演奏してみせたりしてくれました。

小学4年生のころは、舞踊をしたり、楽器もいろいろさわってみたりしていました。そんな中で、音楽は面白い、音楽を頑張りたいという気持ちが湧いてきました。音楽の先生も、この子は音楽の才能がありそうだと、認めてくれていました。

ちょうどこのころ、学校で楊琴を新しく購入しました。それに最初にさわったのは私でした。そのとき、この楽器は大変音がきれいだと思います。それからは、自分なりにいろいろと工夫をしながら楊琴の練習をしました。もちろん、学校の音楽の先生(下放を免れた数少ない先生)にも教わりながら。

——「楊琴」は「揚琴」とも書かれていますが、どちらが正しいのでしょうか。

「楊」、「揚」どちらも書きますね。手偏の「揚琴」の方が多く使われていますね。今の中国では「扬琴」と書きます。「扬」は「揚」の略字(簡体字)です。

小学校3年生のころから簡体字がどんどん増えてきました。私が幸せなのは、元の字(繁体字)も略字(簡体字)も目にして育ってきたから、両方とも読むことができる。小学5、6年生ころは、小説が好きでよく本を読んでいました。まだそのころ、本屋にある本はほとんど繁体字で印刷されたものが多かった。私はそんな本を読んでいたので、ある程度両方ともわかります。今の若い人は略字(簡体字)しか知らないのでは…。

小学5年生ごろ、父からこの楽器が好きなら、この楽器を本格的に習ったらどうだと勧められました。正式に練習するなら先生をさがしてやってもいいと言われました。私ものんきで我がままだったので、「はい、いいです」とすぐ承諾しました。これがスタートとなったのです。

2. 楊琴に励む

——いよいよ楊琴奏者趙勇さんの出発ですね。

そうです。小学6年スタートした時点で、父から本格的な指導がなされるようになりました。まだ子どもだったので、そんなに厳しくは思わなかった。

このころも学校はだいたい午前中授業で、午後は休みになりました。昼食前に下校する。午後は、なにか毛沢東に関するイベントなどがある場合は学校へ行って練習する。何もないときは、だいたい午後1時ごろから5時ごろまで家で練習をしていた。

中国の習慣では昼は家に帰って食事するのが普通で、父母も同じように家に帰って家族全員（二人の妹も）で昼食をとった。昼休みは2時間ほどであった。

楽器の楊琴は、父が長春鉄道局から借りてきてくれていた。昼食後、私は別室で鍵をかけて一人で練習をしていました。このころも貧しい時代で、食料なども配給制だったのでおやつなどあるはずがない。お湯だけを飲みながら練習をしていました。ときどき窓の外を見ると、仲間たちが遊んでいるのが見えるときもありました。そんなときは涙が出てくることもありました。

父は、一人で練習している私をそっと確かめに来ることもあったらしい。家の外まで来て、練習している楽器の音を確認してそっと立ち去る。もし楽器の音がしていないときは、夕食のとき父は「今日は練習できたか？」と聞く。私が「はい、練習しました」と答えると、ひどくおこられました。まだ子どもだったので、父はだませないなあと思いました。

専門の楊琴の先生が毎月1回家に来るようになりました。その時はもちろん父も同席して指導を受けました。父も音楽のプロでありますから、先生の教えたことを受けて、その後は父が私の練習を見てくれました。

苦しいながらもこの様に練習を続けて半年・1年と経過すると、だんだんこの環境にも慣れてきました。いつしか側に楽器（楊琴）がないときびしく感じられるようになりました。私自身ものすごく成長したと思えるようになりました。

——この様な中で中学校へ入るのですね。中学校では・・・。

中学校に入るのですが、ここはちょっと説明しなければわからないと思います。当時（毛沢東の時代）は小学校・中学校・高校合わせて10年間の教育制度になっていました。小学校6年、中学校4年で学校は卒業して、その後少なくとも1～2年間ほどは農村に行つて労働の教育を受けなくてはいけない。しかし、2年間で戻れない人もたくさんいた。（労働教育で認められなければ戻れない。一生戻れない人もいた。）

そこで中学校に入るのですが、これは日本と同じようにそれぞれの地区の学校に入らなければならない。学区が決まっていた。私は鉄路第1小学校だから鉄路中学校に入らなければならないようになっていた。しかし、父は私を長春第67中学校に入れた。私もそこを希望した。

この当時の学校は、すべてナンバーで呼ばれていた。すべて平等だという意味で。私が入った長春第67中学校は、それまでは「長春市実験中学校」（現在は、またこの校名にもどっている）といつて、長春市ではあらゆる面でトップの学校であった。特に、音楽活動ではずば抜けていた。父は、

ここで音楽活動をしっかりやらせようと思ったのです。

余談になりますが、この当時私の父と同じように考えていた親たちも多かったようです。つまり音楽活動を希望する者は大変多かったのです。私の知る範囲ではこのころ、オーケストラの人や音楽に携わっている人たちは他と比べて幸せであった。なぜかという、このころはみんなが貧しい時代で、オーケストラの公演で地方へ出かける。この公演は国からの派遣で、演奏はタダだけど会社や団体の招待で歓迎されて、食事ができた。この貧しい中でごちそうを食べられた。みんなうらやましがった。

オーケストラに入るのはとても難しかった。おいしいものが食べられるということだけではなく、音楽を習いたいという人は大変多かった。他の文化的な活動を選んでもダメで、例えば書道などを励んでもダメ。文化的な活動はダメなのです。…文化大革命だったのです。しかし、音楽だけはよかったです。毛沢東思想を称える武器となったからです。だからこのころの歌は、ほとんど毛沢東のことばで歌詞が作られていました。毛沢東を称えるものばかりです。

3. 中学校時代

——中学校での勉強はどんなものでしたか。普通の授業は。

政治思想に関する教育が多かった。数学や物理、化学のどの授業は普通にありました。成績はあまり厳しくいわれませんでした。まだ良心的な先生もいくらかは残っておられました。私が今も記憶に残っているのは、女性の数学の先生です。大変すばらしい先生でした。

小学校と同じく、中学校でも授業は昼までで、午後からは授業はありません。

——それではみんな午後からはどうしていたのですか。

いわゆる部活動のようなものがいくつかありました。しかし、多くの生徒は帰っていました。そうですね、2/3以上の生徒は帰っていました。私の部活は、学校の毛沢東宣伝隊とでもいうのでしょうか、学校のオーケストラに参加して活動していました。学校には素晴らしい楽器がたくさん置いてありました。

——このころ、趙勇さんはどのように自分の練習をしていたのですか。

学校でのオーケストラ活動の後、自宅で練習を続けました。もう父の監督がなくても、自分で頑張ろうと思っていました。

中学校4年間は、本当に一生懸命練習しました。おもしろくなりました。私もプロになろうと思っていました。少しずつ今の時代のこと、将来のことなども考えるようになっていました。

この時代は、今振り返ってみると大変な時代だったと思います。

小学5～6年ごろからは、ほとんど授業もストップしていて、治安も悪かった。スリなども多かったし、子どもたちのケンカも多かった。二つの派に分かれてケンカする。二派とも毛沢東思想を守るために戦うのです。その守る方法が異なるために戦うのです。最初は小さなグループから、だんだん大きくなり、ついには全国的な集団になって行った。

最終的には武器を持つようになっていった。1967～8年ごろには、毛思想を守るため銃撃戦まで始まった。軍隊の武器庫から銃を持ち出して、二派に分かれて戦った。「紅色革命委員会」と「第二革命総部」の二派だったと思う。死傷者も出たと思います。

このころになると会社や工場などもストップしていた。鉄道もストップした。ただ一部の自動車だけは動いていた。若者を北京に送るためだけ。当時、一般人は簡単に北京へは入れなかった。毛沢東はほぼ毎日のように、天安門広場で若者たちと面会している。普通ならとても毛沢東には会えない。各地方から中学生や大学生たちが毛沢東に会うために、自動車に乗って行く。そのための自動車は動く。自動車は満員で、タダである。天安門広場では「毛沢東万歳!」「毛主席万歳!」である。

当時、劉少奇など毛沢東に反対する者は退けられて、林彪だけが毛沢東の信頼を得ていた。毛沢東主席と林彪副主席ではなかったかと思う。毛語録の小さな手帳は林彪の発想で作られた。この手帳を持たぬ者は違反者となった。ほかに周恩来もいましたが、中国人にはいろいろと評価の分かれる人でした。

——このようにいわば乱世で、中学時代を終わるのですか。

中学の終わりは1976年です。中学卒業間近の時に毛沢東が死にました。その後、本当にいろいろな事件が起きました。一番大きな出来事は江青など4人組の逮捕です。

当時、江青は私たちの活動する音楽や演劇の最高指導者で、現代京劇は彼女が支配していました。彼女の作った八つの劇は全国で大々的に演じられていったのです。私たちも彼女の指導の下で演奏活動をしていたのです。

中学卒業前のちょうどこのとき、隣の町の九台县で文化工作団（小さなオーケストラ）の団員を募集していると、父が知らせてくれました。そこですぐ楽器を持って試験を受けに行きました。その場ですぐ入団が決まりました。父は、私が下放して農作業で手が壊れるよりも、一時的にでもここに入団した方がいいと勧めました。それで、中学卒業する前に入団しました。このとき父は、もう一つ私のために頑張ってくれたのです。それは戸籍を移さずにすむようにしてくれたのです。この当時中国では都会からいなかにはすぐ移動できたが、いなかから都会に戻るのは大変難しかった。いなかの文化工作団に入団して働くのだから、本来は戸籍を移さなければならなかったのであるが、父の尽力で戸籍は動かさずにすんだ。

中学校は卒業せずに、この文工団オーケストラで1年間ほど働きました。わずかですが給料ももらいました。